

セム語学の筑波学派 言語学論叢に見る古代オリエント言語研究の半世紀

池田 潤

発刊の辞によると、本誌は「東京教育大学文学部において、言語学の研究発表誌に用いられていた名称」を拝借して始まった学術誌である。東京教育大学の蔵書を収めた中央図書館 1 階の紀要コーナーに行くと、1959 年に創刊され、第 15 号で終刊となった旧『言語学論叢』を閲覧することができる。そこには著名な言語学者の論文が収録されており、あらためて『言語学論叢』という看板を重さを思わずにはいられない。本学とゆかりの深い先生方の名前も見られ、新旧『言語学論叢』の連続性のようなものを感じさせる。

この連続性はセム語学の分野にも顕著である。東京教育大学～筑波大学は半世紀にわたりヘブライ語を専門とするセム語学者を輩出しつづけた日本で唯一の大学だからである。アラビア語の専門家は大阪外国語大学（1940・）と東京外国語大学（1961・）を中心に養成されてきたが、ヘブライ語の専門家を養成する講座はわが国には存在しない。その中にあって、東京教育大学～筑波大学で 1954 年以来（途中 10 年間の中斷を経て）現在に至るまで、ヘブライ語をはじめとする古代オリエント諸言語の研究・教育が続けられてきたことは特筆に値する。

そこで、この小稿では東京教育大学～筑波大学における古代オリエント言語研究の半世紀を振り返ってみたい。

■関根時代（1954-1975）

昨年 9 月に亡くなった関根正雄先生が東京教育大学文学部言語学科に着任した 1954 年に東京教育大学から筑波大学にいたるセム語学の伝統（以下、筑波学派と呼ぶ）が始まる。関根先生は東京大学文学部言語学科を卒業後、5 年ほどドイツで旧約聖書学を学び、着任の時点では日本におけるヘブライ語研究の第一人者となっていた。それは、1941 年に（おそらく、日本人として初めて）海外の学術誌にヘブライ語に関する論文を発表していることや、

1958 年に日本聖書学研究所の所長となっていることからも明らかである。

関根先生は、東京教育大学に着任してから 1975 年に定年退官されるまでの間、聖書学や神学を学外で講じる一方、セム語学を展開する場として『言語学論叢』(以下、『論叢』と省略)を選んだようである。『論叢』には「文法における心理と論理」(第 1 号)、「時間の言語的表出」(第 3 号)、「古典ヘブライ語 B G D K P T の音韻音的解釈」(第 6 号)、「北西セム語をめぐる最近の諸問題」(第 11 号)という 4 本の論文が発表されている。そこには関根先生のセム語研究に対するひとつの姿勢が現れている。それは、非西洋的な視点でセム語を分析することにより、セム語研究における西洋的伝統を超克するという姿勢である。関根先生の弟子たちがイスラエルやユダヤ系の大学に留学しているのも、この姿勢と無関係ではないと思われる。

関根先生の弟子と呼べるのは私の知る限り村岡崇光氏、笈川博和氏、守屋彰夫氏、塙本明廣氏の 4 名である。村岡氏はイスラエルに留学し、聖書ヘブライ語の強調構文を論じた学位論文をヘブライ大学に出して、Ph.D.を授与されている。その後、マン彻エスター大学とメルボルン大学を経て、現在はライデン大学セム語学科の正教授として国際的に活躍している。笈川氏もイスラエルに渡り、ヘブライ大学で古代エジプト語とコプト語を学び、現在は杏林大学で中東学を教えている。守屋氏は米国ヒブル・ユニオン・カレッジにアラム語に関する学位論文を提出して Ph.D.を取得し、現在は東京女子大学で聖書学を教えている。塙本氏は佐賀大学で教鞭をとり、古代エジプト語とセム語の専門家として活躍している。彼らのうち、『論叢』に論文を発表しているのは村岡氏だけであるが、他の 3 名の名前も名簿等に登場する。

■津村時代（1974-1990）

筑波大学が開学したのは 1973 年のことである。関根先生は筑波に移らず、1975 年に定年となるまで東京教育大学（1978 年廃学）に残られた。関根先生の後継として村岡氏を呼び戻す計画もあったと聞くが、実現には至らず、ちょうど米国から帰国した津村俊夫先生が関根先生の推薦を受けて筑波大学でセム語学を教えることとなった。

津村先生は一橋大学商学部を卒業後、米国の神学校に留学し、そこからブランドイス大学の博士課程に進学した。当時、ブランドイス大学ではウガリ

ト語の世界的権威であるサイラス・ゴードン先生（今年 3 月に他界）が教鞭をとっており、津村先生はゴードン先生のもとでウガリト語と比較セム語学を修め、Ph.D.を取得していた。そのため、筑波にはヘブライ語を古代オリエント的背景のなかで捉えるという新たな伝統が成立した。私は津村先生のもとで人文学類から文芸・言語研究科まで学んだが、その間、津村先生からヘブライ語だけでなく、ウガリト語、アラム語、アッカド語、および比較セム語学を学ぶ機会に恵まれた。

津村先生は『論叢』には寄稿していない。そもそも日本語ではほとんど論文を書かない方だったが、『文藝言語研究』言語篇に 4 本の論文を書いている。「ヘブル語語彙研究に対するウガリト学の貢献について」（第 1 卷）、「ウガリト語研究(1)：ウガリト語の *primaे waw* 動詞 *WLD*について」（第 6 卷）、「ウガリト語研究(2)：ウガリト語における連声 (Sandhi) について」（第 7 卷）、「ウガリト語研究(3)：ケレト叙事詩のプロローグについて」（第 9 卷）の 4 本である。

津村先生のもとでセム語学の薰陶を受け、中間論文を書いたのは依田泉氏、竹内茂夫氏と私の 3 名である。依田氏（常磐大学）は、その後、広島大学を経て米国エール大学に留学し、シュメール語に関する学位論文により Ph.D. を取得している。竹内氏（京都産業大学）は一貫して聖書ヘブル語の研究を続け、1999 年にはライデン大学文学部の客員研究員として村岡氏のもとで研鑽を積んできた。私は中間論文提出後、イスラエルに渡り、テル・アビブ大学でアッカド語の研究をおこない、Ph.D.を取得した。

この 3 名は『論叢』に次の論文を発表している。池田潤「<Waw-Conversive 現象>理解のための作業仮説：談話文法の視点から」（第 5 号）、竹内茂夫「聖書ヘブル語における『独立不定形』と定動詞の語順」（第 9 号）、依田泉「Terms Expressing "Guarantee" in Neo-Sumerian Texts from Nippur」（特別号）、竹内茂夫「聖書ヘブル語のいわゆる目的語の標識'et から見た能格的階層の普遍性」（特別号）、池田潤「エマルのアッカド語における格標示」（特別号）。このリストは、ヘブライ語を中心として古代オリエントの諸言語を研究する学派が筑波に育ったというひとつの証である。

■筑波学派の現在

津村先生は 1990 年 3 月に筑波大学をお辞めになった。その後、しばし筑波のセム語学は途絶えたが、私が 2000 年 4 月に筑波大学に着任し、セム語学の筑波学派を引き継ぐこととなった。ヘブライ語を中心としてセム語研究をおこなうという筑波学派の伝統を守り、非西洋的な視点でセム語を分析するという関根先生の姿勢と、ヘブライ語を古代オリエント的背景のなかで捉えるという津村先生の方針を次の世代に伝えてゆく責任を感じている。さらに、一般言語学に根ざしたセム語研究を実践することにより、過去において独自の世界に閉じこもりがちだったセム語学をより開かれた研究分野へと変えてゆければと願っている。

詳しく述べる紙面の余裕はないが、上記の方向でセム語研究を続ければ、世界的に意義ある学的貢献をかならず果たすことができると私は信じて疑わない。セム語を専攻する学生はまだ現れないが、筑波から世界に羽ばたく若きセム語学者が後に続くことを期待している。

【参考文献】

- Jun Ikeda, "Linguistic Studies: Approaching the ANE Languages from the Oriental Mind," in J. Ikeda, et al. (ed.), *Ancient Near Eastern Studies in Japan: Past and Present (Bulletin of the Society for Near Eastern Studies in Japan, 37)*, forthcoming.